第２　問題作成部会の見解

１　問題作成の方針

平成 14 年に大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の外国語科目となった「韓国語」も６回目を迎え、今回は出題形式や配点で若干の見直しを行った。まず長文問題の小問を増やして全部で 50 問とし、過去の得点傾向を考慮して配点も少し変えた。そのほかに会話問題に長い対話文や図面を取り入れるなどの改良を加えた。しかし、問題作成の基本方針は従来と変わっていない。すなわち、問題作成に当たっては以下の点に留意した。

⑴　これまでのセンター試験の試験内容に準拠する。

⑵　高等学校教科担当教員の意見と評価を最大限尊重する。

⑶　予想される平均点が他の外国語との間に著しい不均衡が生じないように、難易度に配慮する。

具体的には、次のような方針によった。

⑴　音声・文字表記、文法・語い、会話、長文の四つの領域に分けて出題する。

⑵　日本の韓国語教育の現場で使用されている教材、また市販されている教材と辞書類を参考にする。

⑶　表記法については、韓国国立国語研究院の『標準国語大辞典』と延世大学校言語情報開発研究院の『延世韓国語辞典』を参考にする。大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国で正書法が違う場合には、原則として前者の方式に準拠するが、後者の方式による教育を受けた受験者が著しい不利益を被らないように配慮する。

⑷　話し言葉については自然さを尊重しつつも、学校で学んだ外国語であることから規範にそった形にするよう留意する。

２　各問題の出題意図と解答結果

第１問　発音に関する問題、つづり字に関する問題、漢字音に関する問題から構成される。

A　見出し語の発音と同じ初声になる単語の数を問う問題。文字と発音のかい離に対する基本的な知識を問う問題であり、単語も標準的なものを中心とした。正答率は５割を切った。出題の形式上、受験者の知識を正確に判定し得るのかという点が、昨年度と同様に高等学校教科担当教員の意見としてあがっており、今後検討すべき課題であろう。

B　２単語間における激音化と鼻音化に関する問題である。正答率は高かった。

C　つづり字が正しいかどうかを問う問題である。例えば［시키다］と発音される用言は「시키다」（させる）とつづる場合と「식히다」（冷ます）とつづる場合とがあり、単語の意味によってつづり字が異なる。このように同じ発音でつづりの異なるものを、的確に使い分けることができるかどうかを問う。

D　韓国語における漢字音を問う問題。

問１　日本語で「ケイ」という音を持つ漢字「携」、「契」、「掲」の韓国語における漢字音の異同を問う問題である。「契」は계、「掲」は 게 であるが、両者が同じとする誤答が約６割と最も多かった。

問２　日本語で「ショウ」という音を持つ漢字「照」、「焦」、「肖」の韓国語における漢字音の異同を問う問題である。正答率は約３割と低かった。

問３　日本語で「カツ」という音を持つ漢字「活」、「割」、「渇」の韓国語における漢字音の異同を問う問題である。

第２問　文法・語いについての知識を問う問題。出題に際しては、基本的な文法・語いとともに、多様な意味・用法をもつ文法・語いや日本語との表現の違いなど、学習者の間違いやすい点にも重点を置いて取り上げた。

A　用言の活用についての知識を問う問題。変則（変格）用言の活用形から辞書の見出し語を見つけ出す問題である。学習者が実際に辞書を引きながら韓国語の文章を読解する際に必要となる作業である。

問１　問題文の活用形「주운」からは選択肢中「주우다」と「줍다」の両者が導き出せるが、前者は実際には存在せず、また文脈から「拾う」という意味であることが分かり、ㅂ変格（変則）用言である後者が正答だと判断できる。正答率は３割以下と非常に低く、６割以上が「줏다」を選択した。「줏다」は北朝鮮では「拾う」という意味の標準語形であるが、過去連体形は「주은」であるから正答とはならない。

問２　問題文の活用形「써세요」からは選択肢中「썰다」と「써다」の両者が導き出せるが、「(潮や水が）引く」という意味の後者は文脈に合わず、「切る、刻む」という意味の前者が正答となる。「썰다」はㄹ語幹用言なので「세요」の前で語幹が「써」となる。正答率は８割以上であった。

B　与えられた単語の活用形を問う問題である。活用形の学習においては、そのパターンを理解すると同時にどの用言が変格活用であるかを記憶することが重要である。

問１　「구르다」はㄹ変格用言である（基本形の語幹がㄹで終わるものの大部分はㄹ変格用言である)。また「푸다」の連用形（Ⅲ-Ø）は「모으다」などのいわゆるㅡ語幹用言に準じ「퍼」という形をとる（このタイプをㅜ変格とも称する。１語のみ）ので、正答は「굴렀습니다、폈습니다」となる。「푸다」が難しかったようで、正答率は２割半ばであった。「굴렀습니다、푸었습니다」を選んだ者が５割近くいた。

問２　「벗다」「쏟다」ともに正格用言なので「벗으니까、쏟으니까」が正答である。約７割の正答率であった。「쏟다」がやや難易度が高い単語であったのか、ㄷ変格用言だと錯覚して「벗으니까、쏠으니까」を選んだ者が２割台半ばほどいた。

C　助詞、語尾と語い及びそれらの組み合わせに関する知識を問う問題である。

問１　金額について「～に値するもの」をあらわす「짜리」が正答である。「어치」も類義だが、「～ウォン札」の意味では「～원짜리 지폐」を用いる。９割以上の正答率であった。

問２　「～ということになる」を意味する「連体形＋셈이다」を問う問題。これも９割近い正答率であった。

問３　「どこででも吸ってはいけない」の「でも」に当たる形を選ぶ問題。場所を表す「에서（서)」と無差別を表す나の結合が正答となる。同じく正答率は約９割であった。

問４　「時計が止まる」に当たる表現を問う問題。「서다」が正答である。慣用表現には慣れていないのであろうか、正答率は４割弱にとどまった。

問５　「たまりかねて」にあたる「참다 못해」を文脈から選び出す問題。正答率は６割台であった。

問６　「あきれる」を意味する「어이가 없다」を知っているかどうかを問う問題。正答率は７割台である。

問７　終止形に続けて用いられて「～と思う」を意味する「싶다」を知っているかを問う問題。終止形（한다体）「탄다」と基本形（見出し語形）「타다」の違いもともに問うている。正答は「탄다」で正答率は６割台であった。

D　最も近い意味のものを選ぶ入れ替え問題。単に語い・表現を問うだけでなく、文法形式の意味・機能を絡めた。

問１　「-는 대로」が表す「～したらすぐに」に意味的に近いものを選ぶ問題。「도착하면 바로」が正答となる。正答率は７割台であった。

問２　「넉넉지 못한」は「넉넉치 못한」とも書き、「넉넉하지 못한」の縮約形である（縮約した場合激音で表記するのが普通だが平音にもなり得る）。「넉넉하다」は「十分だ」の意であるから、類義は「여유가 없는」である。正答率は７割弱であった。

問３　「대충」の類義語を問う問題。文脈と選択肢から「적당히」がふさわしいことが分かる。意外と正答率が低く、５割台であった。「대개」との誤答が２割半ほどあった。

問４　「어차피」の類義語を問う問題。これもやはり文脈と選択肢から「결국」が正答となる。９割近い正答率であった。

問５　「日が暮れる」という連語表現を知っているかを問う問題。「해가 지다」あるいは「해가 저물다」と表現される。正答率は約７割であった。

E　与えられた日本語の意味を韓国語で表現する、作文の力を問う問題。日本語との文法形式の配列の違いや単語の共起関係の違いに注目した。

問１　「取りに行く」の「取る」は韓国では「持つ」であること、さらに「持つ」に当たる「가지다」と「들다」には用法に違いがあることを知っているかを問う問題。ここでは「所有する」に当たる「가지러」が正答となる。正答率は６割、約２割が「잡으러」を選択した。

問２　「健康管理」を意味する「몸조리」を知っているかを問う問題。「몸조심」も類義語であるが、引用文であることから「몸조리 잘 하시라고」が正答となる。正答率は約４割と低かった。

問３　日本語の「使役の受身」を韓国語でどのように表現するかを問う問題。「着せる」が「입히다」であることはよく理解されていたが、「～してもらう」は構文を変えて「～が～してくれる」としなければならない。約６割の正答率。「もらう」を直訳した「친구한테 입혀 받았어요」を約３割が選んだ。

問４　「手を引く」という日本語の慣用表現をどう表現すべきかを問う問題。「引く」の直訳ではなく、「離す、はずす」を意味する「떼다」を用いた「손을 떼었습니다」が正答である。約８割の正答率であった。

第３問　この大問は、会話文を読んでその文脈を把握し、その展開にふさわしい答えを選ぶものである。今回は、これまでの問題パターンを若干改め、新たな試みも導入した。

A　短い対話文を完成させる問題。A―B―Aという一往復半の対話形式で、Bの発話を空欄にする出題形式をとった。この形式は、空欄を埋める上で必要最小限の情報である前後の文脈のみを与えた形式であり、限られた情報を元に的確な正答を導けるかどうかを問うことを意図している。初めのAを読むだけでは正答が導き出せず、最後のAまで読んではじめて正答が導き出せるような問題となるように注意を払った。また、高等学校教員からしばしば会話特有の言い回し・語尾が難しすぎるとの指摘があったため、この点に配慮するよう心掛けたが、更なる検討が必要であろう。

問１　２つのAの発話内容から正答を導く問題。二つ目のAの発話で「いや、なんとなく」と答えているところからして、Bは①「なぜそんなことを訊くの」と尋ねていることが分かる。

問２　二つのAの発話内容から正答を導く問題。二つ目のAの発話で「少し前にミルクを十分飲んだので、そうではないと思う」と答えていることから、Bは③「お腹が空いたんじゃないかしら」と尋ねていることが分かる。

問３　食事の招待の場面でよく使われる決まり文句である。二つ目のAの発話で「とんでもない。お膳の脚が折れそうなほどのご馳走です」と、食事前の食卓を前にした、相手の謙遜に対するほめ言葉を言っていることから、Bは③「何もございませんが、たくさん召し上がれ」と言ったということが分かる。受験者の６人に１人程度が、招待した側が食事後に言う①「お粗末さまでした」を誤って選んでいた。

問４　会話内容に合うことわざを選ぶ問題。Aが「放送局に就職するのは難しいんだってね」と問いかけているので、事柄の困難さを比喩する④「空の星を取るようなものらしいよ」が正答となる。１割程度の人が事柄の容易さを比喩する②「寝転んで餅を食うようなもの」を選んでいた。

問５　２通りの意味に解釈できる「절 보기(私に会うこと/寺を見ること)」の意味を文脈から判断する問題。二つ目のAの発話で「最近出張が多いので」と言っていることから、一つ目のAの発話は「なかなか私に会えないとおっしゃっていたそうですね」と言っていたことが分かり、②「そうだよ。ずいぶん忙しいようだね」が導き出される。６人に１人が「절」を「寺」と解釈して③を選んでいた。

B　図を用いた問題は今回の試験で初めて導入した。AとBは家具の配置をあれこれ話し合っており、会話の文脈の中で語られている家具の位置関係が正しく把握されているかを問う問題である。会話文自体はさほど長いものではなく、用いられている語が比較的平易であったためか、正答率は高かった。

C　AとBが意見を述べ合う長い会話文を読んで、その趣旨を把握する問題である。従前は、長めの会話文の問題が二つ出されていたが、今回はこれを統合する形で長めの問題一つとしたため、会話本文が長くなっている。また、会話文全体の流れと登場人物の主張を正確に把握しなければ正答に至れない設問となるよう留意した。話題はファッションに関するものであり、受験者にも身近に感じられたためか、正答率はいずれも９割前後と高かった。

問１　直後のAの発話で「そうだね。確かに耳にピアスをした男の子を見たことがある」と言っていることから、Bは④「(茶髪だけじゃなく) ピアスをした男の子たちだっているん

だから」と言ったということがわかる。

問２　茶髪やピアスなどのファッションに対して、社会活性化の点から肯定的な立場をとるＢの一貫した主張を読み取ることにより、②「僕はそんなに否定的じゃないよ」が導き出される。会話文全体の流れを把握しなければ、他の選択肢が誤答であると判断できないであろう。

問３　直後のＢの発話で「つまり、茶髪がどうだとか、身だしなみをちゃんとしろとか言う人たちのことだろ？」と言っていることから、Ａが③「(でもそういうことに対して）眉をしかめる年配の人がいること（も事実だ)」と言ったことが分かる。

問４　Ｂの主張と論理展開を正確に把握することで正答を導く問題である。ファッションを追い求めて茶髪にしたりピアスをしたりすることを否定的に見ていないＢは、問題箇所の前後で「そういう主張を理解できないわけではないけど」「～でもないじゃないか」と言っていることから、②「髪の色やアクセサリーで人の価値が決まるわけ」が導き出される。これも会話文全体の流れを把握しなければ、他の選択肢が誤答であると判断できないであろう。

問５　指示語の内容を問う問題。直前のＢの発話で「茶髪にしたりピアスをしたりする人たちを特別に変な人たちだとは思わないな」と言っていることから、④「人を外見で判断してはいけないということ」が正答であることが導き出される。

第４問　ある程度の長さの論理的な文章を読ませ、書き言葉の表現の理解と文章の論理展開の理解能力を測ることを目的とした。課題文は、「文化」を構造主義的な立場からとらえた論説文で、「文化」はすなわち「脈絡（コンテキスト)」であると主張する。文化人類学等の分野につながる学術的な内容ではあるが、平易な文体で書かれているため、受験者にとっても特に難解な文章ではないものと思われる。なお、第４問及び第５問の長文問題の設問数は、例年合計９問であったが、難易度とのバランスをとるため、今年度より２問増やし、合計 11 問とした。

問１　前後の文章をつなぐ接続表現を選ばせる問題である。前後の文章の論理的関係が把握できていれば正解に至ることができる。

問２　メンコの札をすべて取った子供がそれを仲間に分けるようになる理由を問う問題で、「メンコの札は、メンコ遊びという脈絡（コンテキスト）の中においてのみ価値を持ち、そのような脈絡（コンテキスト）がなくなれば価値を失う。」という第２段落の論旨を理解できていれば正解に至ることができる。

問３　露店の店先においてあるミカンを自分の袋の中に移動させる行為がいかなる意味を持つかを問う問題で、「同じ行為や動作であっても、それがおかれている脈絡（コンテキスト）によって異なった解釈を受ける」という第３段落の論旨を理解できていれば正解に至ることができる。

問４　この文章のキーワードである「脈絡」がどのような意味で用いられているかを問う問題で、課題文全体の論旨が理解できていれば正解に至ることができる。

問５　全体的な内容の理解を見る問題である。例年この部分の選択肢を日本語で提示していたが、そのためか、正解率が著しく高かった。今年度は、難易度を是正する目的で、選択肢を韓国語に改めた。

第５問　課題文は、人生の悩みについて学生時代の個人的体験をもとにして綴ったエッセイである。文章の論理展開の理解能力を測ることを目的とした。

問１　前後の文章をつなぐ接続表現を選ばせる問題である。前後の文章の意味が理解できれば、正解に至ることができる。

問２　熟語的表現である下線部㊺の意味を問う問題である。前後の文脈の意味が把握できていれば、正解に至ることができる。

問３　指示的表現を含む下線部㊻の意味を問う問題である。その直前の文章の部分読みでは正解に至ることができない。前の段落の文章全体と下線部㊻の後の文章の意味、両者の関係を理解しなければならない。

問４　前後の文章の意味的関係から、間に入る接続表現の句末形式を問う問題である。前後の文章の意味的関係が把握できており、接続表現についての文法的知識があれば、正解に至ることができる。

問５　課題文の各文章の論理展開及び文章全体の論旨を把握し、与えられた１文を挿入する箇所を問う問題である。課題文中の「私」が「悩み」から脱するようになる転換点が第３段落と第４段落の間にあることが分かれば、正解に至ることができる。

問６　全体的な内容の理解を見る問題である。第４問の問５と同様、例年この部分の選択肢を日本語で提示していたが、そのためか、正答率が著しく高かった。今年度は、難易度を是正する目的で、選択肢を韓国語に改めた。

３　出題に対する反響意見についての見解

例年、高等学校教員から問題の水準が高すぎるという意見が出されている。今回も、「韓国朝鮮語を実施している全国９割以上の学校では対応できない難易度の高い内容」との指摘を受けた。だが、そのように難易度が高いにもかかわらず平均点は 73 点を超え、「英語」の 65 点をはるかに上まわった。「韓国語」の平均点が平成 14 年度に 82 点、平成 15 年度に 85 点を超えて他の外国語との点数不均衡が問題になって以来、韓国語部会では不均衡が生じないことを問題作成方針の一つとしてきた。この３年間の平均点が 70 点台を保っているのはこの方針が成果を上げたためであるが、結果として難易度が上がり、高等学校教員からこのような指摘を受けることになった。

とは言え、日本の高等学校で行っている韓国語教育のほとんどが４単位から６単位程度である現状においては、多少難易度を落としたとしても、それが一般の生徒たちに対してセンター試験の門戸を開くことにつながるとは考えにくい。「韓国語」の受験者は大多数が韓国語母語話者若しくはそれに近い生徒であると推測される。作成者側は過去の試験結果を見ながら、それに合わせて難易度を調整して出題せざるを得ないのである。これは「韓国語」がセンター試験に導入された時から続くジレンマであるが、日本における外国語教育の方針と制度に由来する構造的な問題であり、一朝一夕に解決されるようなものではない。当分の間は現状を踏まえた現実的な対応を続けながら、将来の韓国語教育を見据えたよりよい方向を模索していくしかない。

高等学校教員側もこのことを理解しており、その要望も例えば、「高等学校で授業を受けている生徒も解けるようなレベルの問題をもう少し出題してほしい」など、抑制した内容になっている。自分たちが教えた生徒が実際には受験できないという状況にもかかわらず、センター試験の問題内容

向上と、ひいては日本の高等学校における韓国語教育の充実のために、センター試験問題を精密に分析して意見を出してくださる教員の方々の御苦労に、心から感謝を申し上げたい。そして、要望には常に誠意をもってこたえられるよう取り組んでいきたい。

これまで出された要望は、すぐには応えられない場合でもその後なんらかの形で取り入れるように努力してきた。例えば、今回の長文問題の増加は以前に出された要望にこたえたものであるし、これまで何度にもわたって出されていた、問題作成者に韓国語教育の現場をもっと把握してほしいという要望については、このたび大学入試センターに依頼して高等学校における韓国語教育に関するアンケート調査を行い、その結果をこれから作成委員が分析検討することになっている。

今回、新たに出された要望についても、同じように時間をかけてもこたえていきたい。問題作成部会としても真摯に取り組むべき重要な内容であるだけに、なおさらである。新たな要望とは、「『ドイツ語』及び『フランス語』に関する高等学校学習指導要領の内容に準拠した内容とは、『韓国語』では具体的にどのような内容で、どのような文法事項や語法、語いを扱うべきなのかを至急に示してほしい」というもので、受験を希望する生徒を指導する際に基準を示さねばならぬ現場としては当然の要望である。また、作成する側にとっても基準が必要であることは言うまでもない。

ドイツ語とフランス語に関しては平成元年文部省告示による学習指導要領があり、以前の「韓国語」報告書では、作成方針はドイツ語とフランス語の学習指導要領に準拠するとされていたので、この部分を踏まえての要望と思われる。だが、ドイツ語・フランス語とは言語構造の違いもあって、準拠するのは難しいので、現在ではこの文言は消えている。問題作成に当たっての目安となるような「韓国語」に即した具体的な内容をもった基準作りが必要とされている。これは問題作成部会の今後の課題となろう。

4　その他の課題

「韓国語」受験者は初回から３年間は急激に増加したものの、平成 17 年度の 213 名をピークに翌年には 189 名に減少し、今回も 186 名とわずかながら減少した。原因としては少子化の影響や民族学校の生徒数の減少などが考えられるが、そのほかに見落としてはならないのが平均点の低下という要因である。受験者が「英語」ではなく、あえて「韓国語」を選択する場合の心理には点数という要素が大きくかかわっていると推測されるからである。しかしながら、平均点に関しては先に述べたような事情もあるので、作成者としては必要以上に振りまわされることなく、よい問題作成を追求していくべきである。